

「馬鹿者を命ず！」

第二十八回 まちおこし進むその三

渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

亀田太（かめだ・ふとし）29歳、伊予南市役所・地域振興課員を解雇され、新庄の部下として伊予南プロジェクトの社員となるが……。

新庄誠人（しんじょう・まこと）39歳、伊予南市役所・地域振興課長を解雇され、伊予南プロジェクトの幹部社員となる。

大渡薫子（おおわたり・かおるこ）21歳、伊予南市長である大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ。

大渡晴美（おおわたり・はるみ）45歳、伊予南市長。大渡薫子の母。榎太一の娘。

登場人物

石打悠太（いしうち・ゆうた）25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

榎太一（えのき・たいち）76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。大渡晴美は娘、薫子は孫。

ロバート・グライナー 49歳、清谷で古民家を改装した旅館「深山の里」を営む。

青山麻衣（あおやま・まい）24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。

シヨーン・次川（つぎかわ）45歳、アメリカの投資ファンド、ヴァインセント・ファンド副社長。

広 壮な古民家を改装した旅館「深山の里」では榎太一が悠太を待っていた。

「宿題が解けたんだって？」

「いえ……まだ解けたと決まったわけではないんです。ただヒントが見つかるかもしれないと思って……それで……」

「だったら夕食の時に話をう。それまではお互いゆっくり過ごそうじゃないか。ロバート！ お一人様追加だ」

カウンターの奥に声をかけた榎は悠太に向き直った。

「ああ、そうだ。大事なことを聞くのを忘れていた。君は薫子のことをどう思う？」

榎の顔は真剣だった。

「好きなのか？」

「それは……」

「好きじゃないのか？」

「だから……」

「はつきりしない奴だな」

前回までのあらすじ
二名島バッテリーの榎社長は、「深山の里」にきた悠太を夕食に誘う。一方、亀田太はヴァインセント・ファンドの次川副社長から「まちおこしを滅茶苦茶にしてやれと次川にこそのかされた」と告げられるように言われる。

榎は失望したような顔をして悠太に背中を向けたが、再び前を向いた。

「君はヴァインセント・ファンドのシヨーン・次川という男を知っているか？」

「はい？」

「うちの会社の株を買って占めていた担当者だよ。知らないのか？ じゃあ伊予南市役所の地域振興課にいた亀田太は？」

「亀田さんがどうかしたんですか？」

「次川という男が亀田と再三、会っているんだ。うちの秘書によれば二人はどちらも良からぬ動きをしているらしい」

「良からぬ動きと言うのは……？」

「『まちおこしを妨害しようとしているんじゃないか』とうちの秘書は言っていたよ。次川と亀田の動向に注意することだな」

二階の客室に通された悠太は窓を開けた。以前とは違う部屋だが、窓外の風景は同じように凜としていた。

「ただらう？」

「あ……いえ……」

「くいつとどうだ？」

「あ……はい……」

悠太は言われるままにグラスの赤ワインを一気に飲み干した。

庭の向こう側は切り立った崖で、その下にはコバルトブルーの溪流が静かに流れている。西日を浴びた山々は紫色に輝き、空にくっきりとした稜線を描いている。

「ふう」とため息をついた悠太は、榎が建物から出てくるのを見つけた。

榎は以前と同じように崖の突端に立って目の前にそびえる山々をしばらく見つめ、再び歩き出して悠太の視界から消えた。

榎は「重要な判断を下さなければならぬい時にはここに宿泊して考え抜くんぞ」と言っていた。

今もまた経営判断にかかわる大事な考えごとをしているのだろうか？
悠太はまたため息をついた。

そんな榎を翻意させることが本当にできるのだろうか？ 二名島バッテリーの本社工場移転を撤回させるなんて、もしかしたら身の程知らずではないか。

露天風呂に浸かりながら榎に話す内容を整理し、部屋に戻った悠太はフロントからの電話を待って、離れの食事処に向かった。榎は以前と同じように掘りごたつのテーブルで赤ワインを飲んでおり、席に着いた悠太にもワイングラスを手渡した。

「いらっしやいませ。確か石打さんとおっしゃいましたよね」



「君が私が今日、何を考えるためにここに来たのか見当がつくか？」

「あ……いや……」

「次川という男をどうするかだ」

「どうするかって……まさか？」

悠太が顔をしかめた。榎が声を上げて笑う。

「前にも言ったが君は本当に隠し事ができない人間だな。君が考えているようなことじゃない。むしろ逆だ。と言うのも私は次川という男を見どころがあるかもしれないと思っっているんだ」

「はあ……」

「話が見えないか？ だろうな。次川という男は実はこの伊予南市の生まれで、父親は伊予南セラミックスという町工場を経営していて、追いつかれるようにして街を出ていったんだ。電子部品向けのセラミックスを作ろうとしていたが、地元金融機関からの追加の融資を受けられなかったばかりか、『うるさい』『臭い』などと周囲の住民たちから立ち退きを迫られたそう。伊予南セラミックスはその後倒産し、父親は失意のうちに亡くなったらしい。以来、次川は伊予南市の人間たちを憎み、恨み、復讐を誓うようになった。うちの会社の株を買い占めようとしたのもそれが理由だ」

「でも……それがなぜ見どころがあると……」

榎は赤ワインを飲み干し、空のグラスを差し出した。

悠太が赤ワインを注ぐ。

「次川という男が胸に過剰な思いを抱えているからだ。過剰な思いは時に周囲を傷つけ、自らをも損なうが、その一方で、良き事でも悪しき事でも、何事かを成し遂げる原動力にもなり得るんだよ。私自身がそうだった。創業してしばらくの間は地元金融機関からは相手にされず、周囲の住民たちからも疎んじられた。その口惜しさが私のバネになったんだ」

「でも、次川という人は伊予南市への復讐を考えているんですね。その気持ちを変えるのは簡単じゃないですよ」

「その通りだ。簡単じゃない。それどころか困難に近いかもしれない。だからどうしたらいいか考えるためにここにやってきたのさ」

榎は赤ワインのボトルを手に持ち、悠太にグラスに残るワインを飲み干すように促した。

一気に赤ワインを喉に流し込む。このままだとすぐに酔ってしまいそう。

「さて、そろそろ君の話聞かせてもらおうか。私が出した宿題を解くヒントが見つ

かるかもしれないと言っていたな」

「はい！」

悠太はグラスをテーブルに置いた。

「あの……以前、榎さんは毎経新聞のインタビューでこうおっしゃっていましたよね。『二名島バッテリーを電池を、生産するモノ作りの企業から、電池を使って人の健康や安全、快適を創り出す企業にしたい』と」

「確かに言ったな」

「こうもおっしゃいました。『その時、重要視しているのは高齢者で、超高齢社会の到来で、健康や安全、快適がより強く求められるようになるはずだ』と」

「それも確かに言った」

「そのお考えは今も変わりありませんか」

「もちろんだ。戦術や取り組みの手法については日々、変化に対応するため調整・修正していくが、基本の方針は減多には変えない。それが私の経営の要諦だ」

「だとすれば、その高齢者の人たちが伊予南市に数多く移住してくれたら、伊予南市に残るメリットがあるとは言えませんか？」

「なぜそう言えると思うんだ？」

「だって高齢者を主なお客さんに考えているんですね。高齢者がまわりにたくさんいたら、高齢者が何を考え、何を欲しがっているのかよくわかるはずですよ」

「なるほど……」

榎もグラスをテーブルに置いた。

「詳しく話してみろ」

「伊予南市では来月、東京の西朱雀地蔵通り商店街でフェアを開催する予定です」

「晴美に聞いているよ」

「その伊予南フェアでは、ただ伊予南市の名産・特産品を売るだけではなく、伊予南市に人を呼び込むきっかけづくりをしようと考えています。農作物の収穫体験や野山での山菜採り、星空やホテルの観賞会など、『都会では得られない体験をしてみませんか』とツアーの募集をかけるんです。そして、やってきた人たちには古民家に泊まってもらいます。伊予南市には大小いくつもの空き家があります。それらをリノベーションして人数や旅行の目的に応じて振り分けようと思っています。食事も地元の料理屋やレストランでもらいます。伊予南市全体を分散したホテルに見立てたアルベルゴ・ディフーズの発想ですね」

「君がさっき言ったメリットと、それがどこでどうつながるんだ？」

「ツアーは主に高齢者を対象に募集をかけます。さいわい西朱雀地蔵通り商店街は、おじいさんおばあさんの原宿」と言われているが高齢者で賑わっていますし、伊予南市には日本の原風景と言ってもいい懐かしい自

然や風物がたくさん残っています。きっと気に入っていただけるはずです。それだけじゃありません。ツアーで伊予南市を訪れてくれた高齢者には、住居や仕事など移住のための情報も提供するつもりです」

「旅行をきっかけに伊予南に移り住んでもらおうというのか？」

「都会に家を持ちながら、時々ここで過ごすしてもらう別荘感覚のプチ移住でもいいと思います。ツアーをきっかけに伊予南の良さを知ってもらって、少しずつ『伊予南に住んでもいいかもしれない』と思ってもらえる人たちを増やしていきたいんです」

「それで『高齢者の人たちが伊予南市に数多く移住してくれたら、伊予南市に残るメリットがあるとは言えないか？』となるわけか？」

「はい……」

榎は首を傾げた。

「伊予南市に住んでもらえるか？ 君は今、仕事と言ったが、その仕事は伊予南市には無いんだぞ。年金だけで食べていかれるくらいだが、そんな人たちは今ではむしろ少数派じゃないのか？」

「そこはまだちゃんと考えていないんですけど、小海島のやり方とか参考になるかなと思っっているんです。小海島にはオリブ記念館という島の名産のオリブについ

ての展示施設があって、オリブ関連商品の売店とレストランも含めて、働いている人たちは全員が六十歳以上なんです。多くは地元の方たちですが、中には都会から夫婦で移住した人も何人かいます。皆、生き生きと働いていましたし、何だか楽しそうでした。それを見て、小海島への移住を決めた三十代の夫婦もいます」

「なるほど……それで？」

榎は先をうながしたが、悠太が黙っているのを見てきよとんとした。

「話はそれで終わりか？」

「ええ……まあ……」

榎はとたんにつまらなそうな顔になり、自分のグラスにワインを注いだ。喉に流し込み、仏頂面で小さく息を吐く。

「その程度のことです私の気持ちを変えられると思っただけか？ 私もなめられたものだな」

「いえ……そんなわけじゃ……」

「君もよく覚えておくといい。私は一度決めた経営判断を簡単には覆したりしない。頑固者だからじゃない。私は経営判断を下すときあらゆる角度から検討し、計算するからだ。短期的なリスクとメリット、長期的なコストとリターン、想定外の事態に遭遇する確率とそれの場合の対処法など、それこそ何十項目も考えてみるんだ。本社工

まちおこし特命社員
石打悠太

馬鹿者を
命ずる

場の移転も同様だ」

榎は遠い目をした。

「しかも以前にも言った通り、本社工場の移転は、伊予南市という狭い場所にとらわれず広い視野で考えてみれば、日本はおろか世界の人々にとって間違いなくプラスだ。製造コストの削減によって電池の値段が下がれば、人々の暮らしはもっと楽になる。もちろんそうした人々の中には高齢者も入っている」

ロバートが料理を運んできた。

「鹿肉の朴葉焼きは火が通ってからお召し上がりください」

鹿肉の朴葉焼きは火が通ってからお召し上がりください」
あめごの塩焼きに箸をつけた榎は一口食べてにっこり微笑んだ。

「こいつは美味しいな。ロバート、また腕を上げたんじゃないか？」

「榎さんもお世辞が上手くなりましたね。この後もどんどん運んできますよ」

「石打くん、君も食べろよ」
悠太は無言でうなずいた。

「少しきつい言い方をしたが、一生懸命考えてくれたことについては褒めてやるよ。仕事の話は終わりにして後は料理とワインを楽しもうじゃないか」

「あの……さっき『話は終わるか?』と聞かれてうなずきましたけれど……実はもう

一つあるんです」

榎は真顔になり悠太を見つめた。

「あ……いや……やっぱりこの話は出しやばりすぎかもしれないので止めておきます」

「そこまで言っておいてそれは無いだろう?」

「あの……怒りませんか?」

「それは保証できないが、私はそれほど短気じゃない」

榎の顔に再び好奇心が浮かんだ。

「言ってみろ」

「伊予南市に高齢者の人たちが移住してくれば、二名島バッテリーで雇っていただけませんか」

「ほう」

榎が虚を突かれた顔になった。

「俺に雇えと言うか。その心は?」

「二つあります」

悠太は意を決した。

「そもそも二名島バッテリーの工場を移転させるというのは榎さんの『都合』というか『思い』ですよ。どっちにしても榎さんの勝手です。あくまでそうしたいのなら、その代わりに少しは伊予南市のことを考えて、まちおこしに協力してくれてもいいじゃないかと思うんです。あ……すみません! これはもともと僕たちの会社の手

伝いをしてきている麻衣という僕の元カノの意見なんです」

「なるほど」

榎は嬉しそうに微笑んだ。

「その意見には一理あるな。もう一つの理由は?」

「もう一つは榎さんがおっしゃったことと関係します。『二名島バッテリーを、電池を生産するモノ作りの企業から、電池を使って人の健康や安全、快適を創り出す企業にしたい。その時、重要視しているのは高齢者だ』と言われましたよね。だったらそのアイデアを高齢者に考えてもらったらどうでしょうか。自分たちのことなのだから、よく分かっているはずですよ」

榎は悠太をまじまじと見つめた。

「それは君の考えか?」

悠太はうなずいた。

「すみません。出しゃばったことを言ってしまうて……」

「謝ることはない。確かに君の言う通りだ。高齢者のことは高齢者自らが一番よくわかっている。君にそう言われるまで私には思いつかなかった」

榎は悠太のグラスにワインを注いだ。

「君の話は『伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるという証拠』とまではいかなかったが、

なかなか面白いところを突いてきたな。満点とは言えないが、それなりに評価したくなる内容だ」

榎は目を閉じ、目を開けた。

「明日、この件でまたじっくり話そうじゃないか。君はあと一日ぐらいこちらにいられるんだろう?」

「ええ……たぶん……」

「決まりだな。ところで、もう一度聞くが、君は薫子のことをどう思う? 好きなのか? 好きじゃないのか?」

「あ……だからそれは……」

「君が薫子を憎からず思っているのなら、私が協力してやってもいいぞ」

榎はニヤリと笑ったが目は笑っていないかった。

榎との食事を終えた悠太は再び温泉に浸かり、布団の上に横になったが、なかなか寝つかれなかった。

榎の言葉が頭の中で木霊していた。

君の話は伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるという証拠とまではいかなかった……。君は薫子のことをどう思う? 好きなのか? 好きじゃないのか?……。

榎は悠太の話をどう受け止めたのだろう? 箸にも棒にも掛からないと失望した

ののだろうか? それとも少しは評価してくれているのだろうか? 薫子さんについての質問はどこまで本気で言っているのだろうか?

やがて榎の言葉に被さるようにして麻衣や薫子の顔が浮かんでは消えるようになっていった。大渡晴美市長の顔も見える。

「ごめんなさい……僕、市長の期待にこたえられなかったみたいです」
晴美に向かって悠太は小声で言った。

耳元で誰かが木琴を叩いている。なぜそんなことをするのだろうか? 嫌がらせだろうか? そもそも僕はどこにいるのだろうか。そう思った瞬間に目が覚めた。ケータイが鳴っているのだった。時刻は間もなく午前九時になろうとしていた。

電話口に出た悠太の耳に「ちよつと頼まれごとしてくれませんか?」という新庄の声が聞こえた。何だか切羽詰まった感じがしないでもない。

「石打くんところの事務所兼社宅で亀田をしばらく預かってもらいたいですか?」
「いきなりどうしたんですか?」
「亀田が今朝、出社するなり私たちに土下座して懺悔したんですよ。実はヴィンセント・ファンドの次川副社長には何度も会



Kazuhiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト・

大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜市生まれ。

日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、

『日経ビジネス』発行人などを務めた後、

2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー

『錆色 (さびいろ)の警鐘』(中央公論社)で作家デビュー。

TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。